

サワラ垣も門も白く染まった北の武家町



代々藩医を務めた旧伊東家（公開）だが、中級武士の住宅によく似た構造・特徴を残しているという。



◀ 武家町「仲町」の象徴ともいえるサワラの生け垣と門に雪がしんと降り積もる。
↑きれいに刈り込まれたサワラの生け垣。白い世界の緑色が新鮮に映る。

[歩いて・見た・歴史の家並み] - 24

弘前市 仲町 (青森県)



道路に面したサワラ垣の中ほどに設けられた門は2種類。左は薬医門で切り妻屋根があり、右は屋根のない簡単な形式の冠木門である。

津軽の冬は白い冬である。

雪は強く、あるいは弱くなりながら、家に街路に降りしきる。弘前市の一角、建物や地割が江戸時代の武家町の旧態をよく保持しているとして、国の重要伝統的建造物群保存地区（伝建保存地区）に選定（1978年）されている「仲町」も白く染まっていた。

この武家町の特徴である長く続くサワラの生け垣と門に、降り積もる雪——冷気が足元からじんわりと全身を包んでいく。

津軽を統一した津軽藩祖為信が、慶長8年（1603年）に築造を始めた高岡城（後に弘前城と改称）は慶長16年（1611年）、二代藩主信枚の時に城と周辺の町割が完成した。伝建保存地区は弘前城の北側、築城当初から町割された「仲町」と総称される武家町の一部である。ここに伝統的建築物30件、工作物（板塀）5件、環境物件（サワラ生け垣）81件が保存されている。

「弘前公園（弘前城跡）に隣接していて観光客も少なからず訪れますが、住民の意志で純粋な生活空間として機能しています。全国に数ある伝建保存地区の中でも、住宅地としての町並み保存を志向している数少ない例です」（弘前市教育委員会文化財保護課）

雪の武家町を縦横に歩く。

何とんでも目につくのは、道路沿いに続くサワ

ラの生け垣である。伝建保存地区内のその延長は3,000m近くになるという。サワラは、桧によく似たヒノキ科の常緑高木だ。岩手県が自生の北限とされており、育ちがゆっくりなことから生け垣に適していると藩が奨励したらしい。

武家屋敷の構成は、周囲をサワラ垣で囲み、道路沿い中ほどに門（冠木門、または薬医門）がある。植栽された庭（ツボと呼ぶ）を挟んでその奥に寄棟造り茅葺き、あるいは切妻造り板葺きの主屋が配置されている。

よく刈り込まれた緑の生け垣や、武家屋敷らしい風格のある門に降り積もる雪を眺めていると、何やら歴史の重みまで感じられる気がするのだった。

伝建保存地区の住宅は生活の場となっているため、道路から外観を見ることしかできない。ただし、

弘前市が管理している武家住宅3棟が公開されており、内部を見学できる。

その1棟、旧岩田家住宅の建物は、約200年前の寛政時代末から文化年間に建てられた。その後、改造、増築されたが、柱や小屋組などの主要構造部材、茅葺き屋根などはほぼ建築当初の姿を保っているという。ちなみに、上杉謙信に仕えていた岩田家が津軽藩の家臣になったのは4代衛門兵衛恵孝の時で、知行は300石とされている。その主屋は式台の玄関を設け、日常生活空間を通らずに接客座敷に行くことができる。これが武家住宅の特徴のひとつだという。

北の街に雪が降り続く。武家町はいよいよ白く染まり、通る人は少ない。しんと雪が降り積もる。

旧梅田家（公開）。江戸時代末期の嘉永年間（1848～1854年）に建てられた武士の住宅という。

●ご愛読いただきましたこのシリーズは今回で終了し、次からは「川に見る・日本の四季」シリーズを掲載します。

- 1 旧岩田家（公開）の外観。約200年前の建築といわれ、柱や小屋組などの主要構造部材、茅葺き屋根などはほぼ建築当時のものとされている。
- 2 接客座敷からツボと呼ぶ庭を望む。庭には松などを植えて景観をよくした。
- 3 茅葺き屋根の天井。質実にして剛健という気風が伝わってくる。

